

記憶 / 「私」 / 小説 : 李恢成を視座として

河合, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

54

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

2005-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010063>

記憶／「私」／小説

——李恢成を視座として

河合 修

「私」を「私」たらしめているものの一つに記憶がある。中井久夫はこの「私」の核にある記憶を「エピソード記憶」と呼び、次のように説明する。

正確にいえば「自己体験にもとづく自己」を原点とするパースペクティブという観点からの記憶である。「私的記憶」と呼んでもよいであろう。言語によって他者に語ることはできて、他者と共有できない記憶である。「中略」相手の意識の中に入り込んで相手の意識を原点として体験を共有できないからには、これは当然である。

中井久夫「徴候・記憶・外傷」（みすず書房、二〇〇四）

人は「エピソード記憶」の連続感のうちに「私」が「私」であることを了解する。だが、それは「私的記憶」であって「集合的記憶」ではない。人が神（全知）の視点を持ち得ない以上、

同じ出来事を体験した者どうしても「私」と「他者」の記憶はディテールにおいて完全に一致することはない。言い換えれば、過去の出来事がそのままの形で保存されているかのように意識される「私」の記憶は、「私」によって取捨選択され、言語化され、意味づけられ、筋立てられた物語であるともいえるのである。そして記憶は想起される「現在」の「私」によって訂正され補完され続ける。過去形の言語に置き換えられた記憶には、どのように訂正され補完されようとも、言語化されない余剰が残る。その余剰も含めた記憶の総体を「他者」に伝えるために記憶の物語は幾度も変奏されるのかもしれない。

李恢成は樺太（現サハリン）からの「引揚げ」とその周辺の記憶を繰り返し作品に描いている。この時期のことを李恢成は『可能性としての在日』（講談社文芸文庫、二〇〇二）巻末の自筆年譜に次のように記している。

一九四七年（昭和二年） 一 二歳

ソ連領サハリンから五月に脱出。日本赤十字引揚船「白龍丸」に乗り、函館引揚者援護寮に入る。米占領軍の命令により強制送還処分を受け、九州長崎県の針尾引揚者援護寮に収監される。父ら数家族はGHQ佐世保司令部と折衝の末、釜山への強制送還処分を免れ、一夏すぎで札幌市に定着。（以下略）

もし、サハリンからの〈脱出〉が成功していなければ、李恢成には「サハリン在住朝鮮人」としての生が待ち受けていたであろうし、もし、〈釜山への強制送還を免れ〉られなければ祖国へ帰国していたのである。この二つの「もし」が実現しなかったところに李恢成の「在日朝鮮人」としての生がある。

記憶が「私」のパススペクティブによって紡ぎ出された物語であるならば、「私」の記憶と「他者」の記憶は抗争的なものにならざるを得ない。李恢成はこのような記憶の抗争的な関係を「証人のいない光景」（『文学界』一九七〇年五月号）に描いている。

戦時期に〈同化少年〉だった〈金文浩^{キムンホ}〉は、ヘファシズム少年^{キムンホ}だった〈矢田修〉からひとつの記憶を尋ねられる。その記憶とはソ連軍のサハリン上陸後、〈神宮山〉の〈カボチャ島〉で〈帝国軍人の死骸を見た〉ことである。戦後の二十四年間〈矢田修〉はその姿を〈まさに大日本帝国の屍体〉であると感じへあの兵士の墓が頭の中にできているような重さ〉に支配されてきたが、〈自分が昔とは明らかに別の人間となり、つまり

朝鮮人として生きていることだけは間違いないと信じることができ〉る〈金文浩〉には〈神宮山での光景はいっこうにひらけてこない〉。

〈帝国軍人の死骸〉を〈大日本帝国の屍体〉と意味づける〈矢田修〉の記憶は、日本人の「集合的記憶」を経由して形成されたものということもできる。これに対し〈金文浩〉の記憶が「不在」という形で抗争的であることは朝鮮人として戦後の日々を生きた故である。

李恢成は「原点としての八月」（『朝日新聞』一九七二年八月一日夕刊）のなかで、「証人のいない光景」が実体験に基づいて書かれたことを明らかにし、後日、記憶の所在を尋ねた友人から〈一緒にその光景を目にしたのは別の友人だった〉という手紙を受け取ったことを記している。しかし、李恢成はそれを単なる記憶違いとしてやり過ぎすのではなく、そこから意味を抽出しようとしたのである。この出来事から見いだされたものは日本人の「集合的記憶」に包摂されない「私」の記憶だけに違いない。

この出来事が、「原点としての八月」が書かれた〈三年前のこと〉であることは注目されてよい。その年に李恢成は「またふたたびの道」（『群像』一九六九年六月号）を発表している。李恢成は「またふたたびの道」の「あとがき」に〈僕はもだしがたい気持ちでこの作品を書いた。〉と記している。この根底には日本人の集合的記憶と抗争的な関係にある「私」の記憶があったのだろう。

「またふたたびの道」は、記憶の想起によって「私」の過去

と現在が往還する構造をもっている。〈義母〉の朝鮮民主主義人民共和国への〈帰国〉を知らせる〈次兄〉の手紙を受け取った主人公〈哲午〉は、〈義母〉が〈趙家〉にやってきた二十一年前に遡行し、「私」や家族の過去を、民族の歴史を遠景に置いて辿り直す。

〈神武天皇の弓の先に止まり、長スネヒコらをこらしめた金の鶏〉を見たと思じた〈小国民〉の「私」、〈チョウセンジン〉と呼ばれなくなり〈物の怪がとれたような開放感〉を感じながらも〈褐色の鶏〉の〈怖い夢〉に取り憑かれた戦後の日々、年老いた祖父母や義姉〈豊子〉を残してのサハリンからの「引揚げ」。〈哲午〉が想起する少年期の記憶は、〈朝鮮人になりたい〉という願望を持ち続けた青年期を経て、〈朝鮮人としての道を歩んでいる〉現在の「私」に連続するものである。〈아이구 이 원수를 누가 갚지!〉(アイゴ。このうらみをいつ晴らすやら)という〈さげび、うめき〉を残して死んだ〈父〉の記憶も同様である。〈父〉は祖国へ帰るつもりで偽造パスポートで日本人になりすましてサハリンから脱出し〈海ひとつ越えれば祖国〉というところで〈祖国の南と北に三十八度線が生じていることを〉知り〈帰国を思い止め〉た。その〈父〉の半生を、遺体焼却室の銃眼から〈紅蓮の炎につつまれ〉た〈父〉を見ることで受け止めようとした〈哲午〉にとつて、〈父〉の記憶は〈ああ悔いのない朝鮮人になりたい〉という思いを経由して現在の「私」に連続している。

その頃、父が死んだ。肉親の死に接してみると、私はその

死と共に埋もれていく父の言葉を思った。
 (「容疑者の言葉」、『新鋭作家叢書 李恢成集』河出書房新社、一九七二年、所収)

李恢成は日本語で創作を始めた動機をこう記している。〈父〉の死に象徴されるように、戦後二十四年の年月は在日朝鮮人一世の生きた想起を消失させつつあった。〈朝鮮の歴史や地理、風習をほとんど知らなかったし、肝心の国語もろくに話せぬ始末であった〉在日朝鮮人二世〈哲午〉の状況はおそらくほとんど李恢成のものでもあったのだろう。在日朝鮮人一世の生きた想起の消失は、二世世代にとっては朝鮮と「私」とを繋ぐ糸の切断であり、「今、ここに、こうして」存在する「私」を了解するための物語の消失でもある。

多くの日本人にとって日本人であることは自然に受け止められるが、在日朝鮮人二世の多くは〈哲午〉のように〈朝鮮人であることを自然に感じる〉ことができない。彼らにとって日本の文化や習慣のなかで日本語を生活言語として生きていることは、家族の過去や民族の歴史との関係でしか捉えられないのである。在日朝鮮人二世にとって、記憶は過ぎ去った現在の痕跡ではなく、連続する現在であるといえる。

二世、三世という青年たちがいま在日朝鮮人六十万人のうちすでに八〇パーセントを占めている中で、民族的な主体性を確保するということは、きわめて大きなテーマとなっているわけです。ほくはこういう問題にいま自分なり

に深くかわらざるを得ないし、しかもこういう問題を過去から現在というふうな方法を用いながら小説化することは、全く当然なことだと思ふのです。

〔文学者と祖国〕、『李恢成対談集 参加する言葉』、講談社、一九七四年、所収)

李恢成にとって、「記憶」と「私」と「小説」の関係はこの時点では整合性のあるものとして捉えられていた。記憶を想起することによって現在と過去を往還することは、在日朝鮮人二世である「私」を剔抉する方法としても、その「私」を小説に表現する方法としてもへ全く当然なことであつたのである。だからこそ、「またふたたびの道」では「私」の過去という「小さな物語」を祖国統一、民族の歴史という「大きな物語」と接続させて語ることができたのである。

『群像』二〇〇四年五月号で「地上生活者」第二部が完結した。「地上生活者」は、小説の材料を得るために、札幌にやってきた六十四歳のへ売れない小説家であるへぼく・愚哲が、札幌で過ごしたへ未成年期を回想する形をとっている。これまで断片的にしか触られることのなかつたサハリンから「引揚げ」た後、上京するまでの時期を扱つた「地上生活者」によって李恢成の自伝的作品は幼少期から青年期まではほぼ時間的連続性をもつものとなつた。しかし、「地上生活者」が自伝的作品の空白を埋めるといふ意図だけで書かれたのではないことは明らかである。

「地上生活者」で「私」の記憶にわけいり物語る語り手には

「またふたたびの道」のように現在の「私」に収斂される記憶を整合的に語っていく姿勢はない。記憶の欠片を一つ一つ手に取り、その真贋を確かめながらへ未成年期への記憶のなかに拡散していく「私」を語っているようにさえ思える。

ひとは自分の置かれた社会的状況のなかで記憶を喪失するのではなくただ隠蔽してしまうのだ。なんらかの政治的打算とか利己心とか盲信とかによって。こうして、表向き、過去の歴史の記憶は消えてしまう。けれども、意識下の牢獄の中に深く閉じ込められてしまうだけなのだ。

この第二部第三章に記された記憶の不確かさに対する感覚は作品全体を貫いているように思われる。現在の「私」に連続する整合的な記憶だけが過去なのではない。へ意識下の牢獄に隠蔽された記憶を剔抉しなければ「私」の生の全体を語つたことにはならない。第二部の完結までに三年半、連載五十二回を費やした長編で李恢成が表現したかったことは、あるいはそういうことなのかもしれない。

「地上生活者」で扱われた、李恢成が自らへ札幌時代と呼ぶ十二歳から十九歳までのへ未成年期は、これまで苦痛に満ちた時期として語られてきた。「伽椰子のために」(新潮)一九七〇年八・九月号)には、高等学校の生徒集会で「ぼくら日本人高校生は」と演説した主人公へ林相俊イムサンジュンがへ何者かが鋭い声で「嘘つき!」と叫んだのをへ聞く場面が描かれている。へ林相俊はマイクの前で絶句し、演壇を降りる。

李恢成は「札幌時代」に日本名を名乗って学校生活を送っていた。その間の事情を「名前の歴史」(『文学界』一九七二年一月号)に次のように記している。

スピーチの冒頭、「李恢成です」と自分の姓名を名乗った。面倒なことに、現在の自分が何者であるかをはっきりさせなければならなかったからである。というのは、この地では僕を「岸本恢成」として憶えている人々がおり、そのわけは札幌時代の僕がその姓名を用いていたからであった。僕があえて話の冒頭にそうしたことを意識し、「李」を名乗ったのは決して過去の自分を断絶しようとしたのではなく、一人の人間の変遷をそれなりにしめたいとおもったからである。だが、あの一時間、小止みなくみぞおちを圧しつけていたうずきは、そもそも講演なるものにはじめて接した人間の生理的緊張とはまた違った、一種の自分へのやましさのためだったともいえるようだ。

札幌時代を思い出すことは苦痛である。その頃の僕は、朝鮮人という「自己の正体」を匿すのにキユウキユウとしていて、うその多い生活をしていた腸をたぐり出して洗うようであるが、姓名にこだわったのもその時代である。

このような記憶が「地上生活者」の主人公へぼく・趙愚哲へのこの街によって拒まれている、という、いかんともしがたい強迫観念やへこうした未解決の宿題に、ぼく・趙愚哲は、今こそ正面から取り組まなくてはならなかった。ぼくは努力す

るつもりだ。未完成のこの人生に向き合おう」という意識を生んでいる。

やや図式的に李恢成の自伝的作品に描かれた幼少年期から青年期への道筋を示せば、「同化少年」から「半チヨツパリ」を経て「朝鮮人」ということになるのだろう。「自己の正体」を匿し日本名を名乗り日本人として他者に認識されていた「札幌時代」、言い換えれば「半チヨツパリ」でもなかったこの時期はこの道筋から外れた、いわば迂回路なのである。

ぼくの戦後がどうやってはじまったか、ここで趙愚哲に聞いてみよう。むろん、高松愚哲にも登場してもらわなくてはいけない。なにしろこの二人はもともと同一人物であるのだ。この「ぼく」にしても、当然のことながら、そうであるが。とはいえ、この三者が、はたして幸福な関係であったかどうかはおおいに疑問のあるところである。ぼくが観察したところ、現在にしても、同じことがいえそうなどころに大きな問題が潜んでいるのである。

(第一部第六章)

現在の「私」つまり語り手のへぼく、過去の「私」へ趙愚哲、へ「自己の正体」を匿して存在し他者に認識されていた「私」へ高松愚哲の使い分けは、自己を客観化、客体化して記憶と向き合おうとする意志の表れであるようにも、外に現れた「私」と内部の「私」の分裂を表現したものであるようにも思われる。「伽椰子のために」で「嘘つき」と叫んだ

「何者」かは続けて「なぜ、お前はへぼくら」と言うんだい。
 「君ら」と言う方が正しくはないのかね。お前は朝鮮人学生なんだ。もっともそれを知っているのはお前とこのおれだけだがね」とへ相俊にささやく。へ札幌時代の李恢成にはへこのおれが常に付き纏っていたのかもしれない。隠蔽されていたへ札幌時代の記憶を別扱しようとしたとき、「伽椰子のために」では輪郭を結ばぬ亡霊のような存在だったへこのおれがへ趙愚哲チヨウウヂョルとして造形されたのである。

「地上生活者」でへ札幌時代を描くために、李恢成は時計の針をサハリンからの「引揚げ」まで戻した。この出来事が描かれるのは「またふたたびの道」、「サハリンへの旅」〔群像〕一九八二年一月号、一九八三年一月号、「百年の旅人たち」〔新潮〕一九九四年五・六月号〕に続いて四度目である。これまでサハリンからの「引揚げ」は、日本人のパスポートを偽造して日本人になりすまして「引揚げ」たと描かれてきた。年老いた祖父母や義姉、そして「引揚者協定」の対象外であった多くの朝鮮人を残してのこのような手段による「引揚げ」は、李恢成の自伝的作品の主人公たちに罪障感を刻んでいる。「またふたたびの道」のへ哲午テッポが見た、「かつちやーん」と叫びながら港を離れた「引揚げ」船を追うように防波堤を走るへ赤毛を振り乱した少女の幻覚は、このような意識の象徴である。この罪障感を反転させる形で李恢成の描く主人公たちはへ朝鮮人になるへ志向性を獲得していくのである。

しかし「地上生活者」に描かれた「引揚げ」はディテールが異なっている。

もし趙家の長男である愚基が運よく民政署の通訳をしているならば、もしこの「ダーダー通訳」の上司がユダヤ系ソ連人でなかったならば、もし出国時になんらかの偶然がこの一家にさいわいしたりお目こぼしにあずからなかったならば……。こうした「もし」が介在しなければ、趙一家がタタール海峡を無事にこえてくるなんてことはゆめゆめ想像できない。

こうした幾つかの「もし」のおかげで、趙一家は臨時身分証明書を手し、朝鮮人としてサハリンを脱け出すことができたのだった。
 （第一部第七章）

このディテール変更の背景には、長兄の証言によって李恢成の記憶が訂正されたことがある。李恢成は「私事訂正二つ」〔新潮〕一九八三年二月号〕にへ長兄によれば、私たち一家は「日本人」になりすまして「密航」したのではなく、「朝鮮人」と明記された旅券をつかって日本にやって来たというのである」と記している。民政署の通訳をしていた長兄はソ連人の上司に祖国帰国の希望を訴え、へ「朝鮮国籍」のパスポートを手に入れたと語り、李恢成はへ当事者の偽らざる証言」としてそれを受け入れた。では、記憶の訂正が一九八三年に行われたにもかかわらず、その十一年後に書かれた「百年の旅人たち」は何故、訂正される以前の記憶のままに書かれたのだろうか。

「百年の旅人たち」は、サハリンを脱出した朝鮮人一家が押送列車で日本列島を縦断し、針尾島の収容所で祖国の分断状況

を知り、帰国を断念するまでを描いた作品である。「百年の旅人たち」が李恢成の記憶を下敷きに書かれていることは間違いない。しかし、「百年の旅人たち」は「またふたたびの道」のように十二歳だった「私」の視点からは書かれていない。語り手はそれぞれの登場人物の内部に入り語っている。へ：今問われているのは、人間の精神性なのだが、そのことが軽視されているのだ。これが現在のあからさまな姿なのだ、へわが民族の人間は、『民族』という全体の呼び名の中に自分をまぎれこます前に、まず個人として自分の過去をあきらかにした方がいい。…。作品末尾近くで練り広げられる牧師と元坑夫の会話は、作者ともう一人の「私」との対話のようである。

「百年の旅人たち」を書くことで、おそらく李恢成は、サハリンからの「引揚げ」を起点とする「私」の記憶に一つの句読点を打とうとしたのである。思い違いであろうとも、その記憶を纏って生きた年月はまぎれもない「私」の生である。その生の時間を肉体に刻んだ現在の「私」から見た「引揚げ」という記憶を小説化するために、作者は「私」以外の複数の声を必要としたのだろう。李恢成自身を思わせるへ朴鳳石への三男へ珍浩へは登場人物の一人と化し、多くの登場人物がその内部から発する声によってその出来事を浮き彫りにしようとしたのである。

「地上生活者」で語り手のへぼく・趙愚哲へがときに抑制的にしか語らないのは、へ未成年期への「私」の目線で「私」の記憶を語ろうとしたからだろう。たとえば、「またふたたびの道」でへ引揚げの相談をうけたとき、それを同情として感じた祖父は自分が負担となることを潔しとしなかったのであるへと

意味づけられていた祖父のサハリン残留は、へその日の朝、祖父はいつたいなにを考えていたのだろう。趙愚哲つまりぼくの考えは今その一点に集中するへと疑問形で記されている。

第一部第十二章には主人公が朝鮮戦争勃発のニュースに接した際のこと描かれている。語り手のへぼくへはへもしぼくがそのとき、北朝鮮のどこかにいたら、きつと人民軍兵士として南下していたにちがいない。ぼくはもう十五歳になっていたから、半大人として学徒動員されている可能性がおおいにあるのだ。むろん、韓国のどこかにいても、おそらくおなじ運命をたどっていたにちがいないがへと考えるが、へところがぼく、趙愚哲は、高松愚哲として、日本の北方の都市にいたのでそんな気遣いはまったく無用だったのであるへと目線をへ高松愚哲へつまりへ未成年期への「私」に戻していく。

ここには「大きな物語」のなかで「小さな物語」を語ろうという姿勢はない。記憶を想起している「現在」の「私」によって書き換えられた記憶を語るのではなく、過ぎてしまった時間のなかに凝結している「私」に還り、過去形の言語で保存されている記憶からこぼれ落ちてしまった記憶の余剰を拾い集めようとしているかのようにである。

「私」の記憶をその時の「私」の目線で小説に表現することは、一つの結末に収斂していくプロットを排除することでもあるのだろう。多くの場合、人の生涯はいきつもどりつしてとりとめがない。とりとめない生涯をその時々々の目線で語ることは、つまり、現在という超越した視点から過去を一つのストーリーとして語ることをしないということ、小説から物語の要

素を抜き取ることもある。「地上生活者」はそういう方法で書かれている。三年半、連載五十二回を数える長編は一向に結末らしいものを感じさせずに、主人公の「ほく」が「井戸の中に飛び込んで」第二部が完結した。だが、それは当たり前といえど当たり前のことなのだろう。人の生涯はある時点で結末を迎えるはずもなく続いていくものなのだから。

「またふたたびの道」が「過去から現在というふうな方法を用いながら」民族のな主体性を確保するという「大きなテーマ」を描くことができたのは、換言すれば、「私」の記憶である「小さな物語」を「祖国統一」「民族の歴史」という「大きな物語」に結びつけることができたのは、現在に収斂する整合的な記憶を語ったからではなからうか。

「地上生活者」はあえて「大きな物語」のなかで「私」を語るうとはしていない。第一部第一章で「ほくは、「大きなテーマ」というやつが最近では苦手になっていた。「小さなテーマ」の方が、自分がよく見える」と記した李恢成は、確かに「小さなテーマ」から踏み出そうとはしていないようにも見える。だが、「地上生活者」が単に個人的な生の遍歴を書きつづつたものでないことは言うまでもない。「未成年期」の記憶をその時の目線で語るといって「小さなテーマ」に徹底的にこだわることによって、記憶のなかの「私」を圍繞していた時代や社会の不気味な姿がよりリアルに描き出されている。

李恢成が行ってきた「私」の記憶を小説に表現するという営為は、「私」、「記憶」、「小説」のそれぞれを問い直すことに他ならない。「地上生活者」第三部の再開が待たれる。

「付記」

本稿は二〇〇四年七月一七日に法政大学六二年館で開催された法政大学国文学会二〇〇四年度研究大会において「在日朝鮮人二世文学の『私』——李恢成を中心に」というタイトルで口頭発表したレジメを改稿したものである。改稿に際し、大会での質疑や、指導教授であられる勝又浩先生をはじめ、大会後にいただいた多くの方々の貴重なご意見を取り入れさせていただいた。ここに改めて感謝の意を書き添えておきたい。

(かわい おさむ・博士後期課程一年)